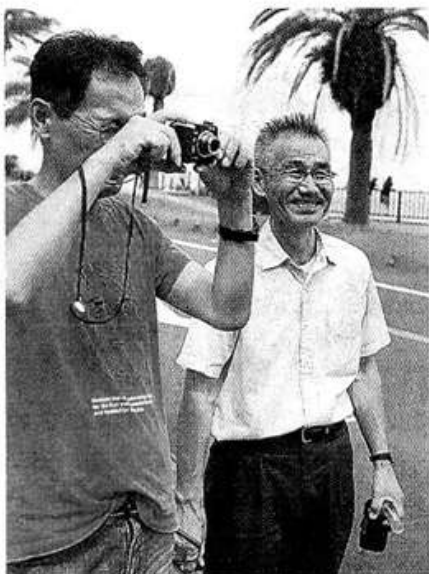


# カメラ 障がい者に光

暑い日差しが照り返す8月初旬。宮崎市の観光名所「鬼の洗濯板」を見渡せる道の駅のそばで、コンパクトデジタルカメラを持った男女6人が、花を撮ったり近くの人に声を掛けたりしていた。彼らはみな、精神疾患を抱えた患者たちだ。

参加者に声をかける小林さん(右)。撮る対象は参加者の自由で、課題などもない。宮崎市内海



## 宮崎 精神科のワークショップ

宮崎市の精神科病院「若草病院」のデイケアに、「写真」というワークショップがある。隔週で催しており、外来患者のうち毎回5～10人ほどが参加。市内の公園や商店街へと出かけ、30分ほど撮影して病院へ戻り、みんな写真を講評する、という内容だ。

講師は、障がい者写真集団「えん」を主宰する宮崎市の写真家、小林順一さん(62)。精神科クリニックや支援センターでも写真講師を務めている。

小林さんが精神疾患と向き合うようになったのは2001年。20歳だった長男が、統合失調症を発病したことがきっかけだ。入院を繰り返すうちに社会とのかかわりを失い、社会復帰が難しくなっていく長男の姿を目の当たりにした。「これが精神医療の実態なのか」。衝撃だった。

何かしなければと考えあぐねていた時、

仕事にしていた「写真」を通じた支援を思い立った。地域の患者を募って、写真サークルを始めると、カメラを手にした参加者がいきいきとした表情を見せた。

「誰かに見られている」という妄想症状が出やすい精神疾患は多い。カメラを持つことで、「ファインダー越しに『見る側』になる」と小林さんは話す。

県立看護大の小笠原広実准教授(53)＝精神看護学＝は写真撮影について「誰にでも手軽にでき、何度も試せる。自信を失ったり、失敗を恐れたりしている当事者(患者)たちには、自信へとつながる」と話す。

講評で小林さんは、写真の出来栄よりも、撮った視点をほめるようにしている。小笠原さんは「それぞれの個性を大事にしようとする姿勢がすばらしい」。

8月初旬に初めて参加した不安障害の男性(57)は「カメラは難しいイメージがあったけど、気軽に撮れた」。男性は昨年12月に発病し、今でも漠然とした不安に襲われることがあるという。終了後、「先生にほめられるのは、うれしいね」と笑顔を見せた。

撮影した写真はホームページ (<http://photoen.miyachan.cc/>) で公開している。「参加者たちは、自分では気づいていないすばらしい感性を持っている」と小林さんは言う。(坂本進)

レンズ通し「見る側」へ